

令和8年 第4回大河原町教育委員会定例会会議録

- 1 招集日時 令和8年4月24日（金） 午後2時00分
- 2 招集場所 大河原町役場 2階 第1会議室
- 3 出席委員 一盃森広志委員、丹羽宜博委員、林恵美子委員、片倉亜寿香委員、鈴木洋教育長
- 4 説明のため出席した者
櫻田尚 教育総務課長、齋修 生涯学習課長、千葉康弘 学校教育専門監
- 5 開 会 午後2時00分

6 令和8年第3回教育委員会定例会会議録の承認について

鈴木教育長 | （委員全員に諮って）承認する。
林委員、片倉委員 署名。

7 教育長報告

(1) 一般事務報告

報告第3号 令和8年度町立小中学校児童生徒数について

教育総務課長より説明。

一盃森委員 | 質問ではなく感想であるが、改めて大河原小学校の新一年生が99人であり100人を切った。また大河原南小学校の入学式に出席したが、南小も30人を切るのは初めてとのことであった。本当に子供の数が減少の一途というのを実感するような状況である。色々なところで様々な課題が出てくると思う。例えば教室が空いてくるいうことが出てきた場合は、それも有効に活用できるよう併せて考えていければ良いのではないか。

林委員 | 一盃森委員のご意見に加えて、大河原小学校の特別支援学級の人数で、一年生が7名いる。このことは、とても学校は大変なことであると思う。特別支援教育支援員の皆さんがいるため、その方たちにも大きな役割を担っていただきながらの運営だと思う。ただ合計40名も特別支援学級の児童がいるということは、1クラス以上の所帯になるということ。これは学校としてはすごく大変なことに取り組まざるを得ない状況にあるのだと感じたし、驚きであった。

鈴木教育長

就学指導が進んでいて7名になっているのであれば、今後の教育活動に子供の成長を委ねるといふような形で考えられるが、それにしてもお子さんをお預かりする学校としては、非常に困難を極めるだろうなと感じた。今後も陰ながら見守り、応援していきたいと思ったもの。

今回、各小中学校に配置している特別支援教育支援員について、金ヶ瀬中学校の特別支援学級の生徒が比較的人数が少なく余裕があったため、支援員の調整を行い、大河原小学校に一人回した。大河原小学校に配慮の必要な児童が多く大変だということで、教育的配慮の人事配置を行ったものである。町内小中学校の特別支援学級児童生徒数が合計96名というのは、不登校とほぼ同じ数である。特別支援学級の子どもの約4割が不登校になるのではないかと私自身の感覚で感じる。とくに大河原中学校は多い。他の6割が普通学級の不登校ということになる。割合は5、何パーセントだと思うが、全体から見ると大きな割合となっている。

(2) 専決事務報告 なし

8 議 事 なし

9 その他

鈴木教育長

お配りしたクリップ留めの資料をご覧いただきたい。部活動地域移行に係る外部指導者一覧で、4月3日現在よりも6名増え、全部で45名となった。23種目、全部の部活動に外部指導員を張りつけることができた。3年目で達成できたもの。

丹羽委員

素晴らしい。お疲れ様でした。

鈴木教育長

ただ、教員の兼職兼業が23名と増え、割合としては51%となり去年よりも増えた。先生方がやってくれるということで、意欲を持って取り組んでくださるのではないかと考えている。

三枚目の資料は、4月10日河北新報の朝刊に掲載された「ふとう考⑩～ねえ教育長、学校って通う必要ある?～」の記事で、私と仙台市教育委員会の天野教育長のインタビューが載っているもの。3月中に取材を受けた記事でございます。

(1) 教育長報告①

1 祝 新たな体制でスタート

新年度になり、これまで校長会を2回開催した。大きな1点目は、新たな体制でスタートということで、金ヶ瀬中学校に小室昌弘校長先生、教育委員会には千葉康弘学校教育専門監

が来られた。よろしくお願ひしたい。

記載している①から⑥まで具体の取組目標については、重点というかここに力点を置いて、学校運営をしていただきたいという事項を列挙したもの。授業改善はもちろんであるが、新規不登校を町全体で10人以下にする。それから、いじめの早期発見と早期対応、それと初期対応に関する詳細記録、これが本当に大事である。それから4番目、配慮の必要な児童生徒に対する個別最適な支援体制の構築、これはリタリコのソフトを使って、今年度から本格実施するもの。それから、やはり体づくりというか、健康づくりということで、外遊び・体育の授業の充実、部活動の推進、それから6点目が、やはり音楽とか図工とか美術とか、そういう絵を描くとか、音楽をつくるとか、あるいは物を作るとか、これは人間にとって非常に重要であり、そういうものも大事にしていきましょうというもの。

2 令和8年度大河原町の学力向上策について・・・別冊

それから大きな2点目が、大河原町の学力向上策についてということで、別冊にお配りしているもの。今年度、国語の部分をごにこに加えたため、少しづきはぎだらけのものになってしまっているが、算数中心だった内容にプラス国語を入れたもの。

6ページ目をご覧いただきたい。今後変えようと思っている箇所が、真ん中辺りの授業の流れについてで、問題把握、見通し・めあて、個人解決とある箇所である。自力解決とも言うが、自力解決というと、自分1人で全部やらないと駄目だという意識があって、先生方もわからない子に何とかわかるようにしようとするが、ここでわからなくても良いのである。筑波大学附属小学校の副校長をされた田中先生は、自力解決という言葉を使わず、一人思考、そして短い時間でわからない子が苦しくないような授業をやりましようとしておられるため、この6ページの文言も今後変えていかなければならないと考えている。

次に11ページからの『主体的・対話的で深い学び』を実現する授業では、国語の内容を入れたもの。主に石井順治先生の文献からとったものだが、教材によって、あるいは児童生徒によって、授業の展開を柔軟に変えてもらおうという考えである。

13ページからまとめたのは「深い学び」とは何かで、次期学習指導要領でも、深い学びが大事だとあり、では深い学びとはどういうふうに捉えるかということで、そこにまとめたもの。また、15ページでは机の配置について、コの字型やペア型、4人グループ型配置が「対話的な学び」を効果的にすると記載したもの。

先日、大河原南小学校の学校運営協議会に出席したところ、全ての学級がコの字になっておりすごいなと感心した。対話的に学びを深めていこうという姿勢が見られて本当に良いと感じたもの。

3 『「全員参加」授業のつくり方「10の原則」』

全員参加の授業のつくり方ということで、これも筑波大学附属小学校の田中先生と桂先

生が書かれた著書をもとに原則 10 まで入れたもの。

やはり国語の授業だと、わかる子だけの発言で、2 割の子は発言するが、8 割の子は黙っている。そういう 8 割の子が参加できるような授業ができないかということで、私も年度末の校長会で提案させていただいたものだが、今回ここに書いてあるようにスタート、板書、それから判断する場面など、いろいろな授業の各場面において、全員を集中させる方法というのを考えていかなければならない。その中にやはり対話というものも入ってくるのだと思う。これらのことをこれから授業の中で一つ一つ考えながら、授業作りに取り組んでいってほしいと思う。やはりここで大事なことは、間違いやつまづきを大事にする、ということなのだと思う。

4 『学校に行かなかった僕が、あのころの自分に今なら言えること』

大きな 4 点目は生徒指導、不登校についてで、小さい頃に不登校であった石井しこう氏が書いた本で、Q&A 形式で非常に読みやすい本である。

例えば、みんなの前で本当の自分が出せません→出さなくてよい。新しいクラスに変わります。自分がどう見られているか心配です→嫌になったら、苦しくなったらその場を離れていいんだよ等。

また、親の期待に応えられない、不登校である自分に絶望しています。という問いには、作家で僧侶でもある玄侑宗久氏が、ブレてもいいんだよ、揺らいでもいいんだよ。ブレないなんて無理だということをおっしゃっている。あとは発達障害かも知れないという悩み。石井さん自身も発達障害だった、39 歳ときにわかったとのこと。

5 『学びの素顔』(石井順治)

5 点目は学びの素顔という石井順治先生が書かれた読み物で、石井先生が教師であったときに、授業の中で体験したことをもとに、この物語を作っており、子供たちにも読んでほしいと思う。対応的学びはこうするんだよ。こういう姿なんだよということで、子供たちに読み聞かせをお願いしたいと思う。

6 モンスター・ペアレント論を超えて

(1) 学校ではなく「法律がそうしろ」と命じているのです

(2) 保護者の子ども時代のつらい体験を、今の教師たちが聴く

(3) 「訴訟保険」から「いじめ保険」そして「不登校保険」

6 点目は、小野田正利先生のモンスターペアレント論を超えてより、(1) はいじめられた側ではなくて、いじめた子の保護者が納得がいけないという非協力的な態度に対する学校側の対応の仕方について述べている。その対応の仕方については、法律で決まっているので、そうやらざるを得ないということをお納得してもらわなければならない。2 点目は、保護者が自分自身が子供の頃に受けたいじめの悔しさを持っており、

自分の娘がそういういじめにあって学校にクレームをつけてきた事例。小野田先生は母親を講師として職員研修をやったらどうかと提案した。母親も快諾して何度も話しをして、鬱積されたものが解消されたと同時に、母親の負の感情と学校側がしっかりと向き合うことで解決に向かうことができた。

3点目は、不登校保険という新商品で、不登校の定義に該当し、スクールカウンセラー等への専門的相談を受けた場合に見舞金10万円が支払われるという保険。

7 第1回大河原町教育研究会について

7点目は、第1回大河原町教育研究会が5月1日に開催される。いつも私の講話で終わったので、今回は講話は短くして、大河原小学校と大河原中学校の取り組みについて発表してもらおうと考えている。

教育長報告②

1 おおきな木

(1) 私を作った書物たち (宇垣美里)

(2) 『おおきな木』(シェル・シルヴァンスタイン著 村上春樹訳)

1点目は『おおきな木』という絵本で、フリーアナウンサーの宇垣美里さんが新聞社の取材を受けて書いたもの。宇垣さんは小学校のときは図書館の端から端まで本を読んだという読書家で、家でも親が定期購入してくれた本に囲まれて育った。幼稚園のときに宇垣さんが気に入ったのが、この『大きな木』だったということで紹介している。

2 世界一の侍選手の育ち方 (近藤義男)

大きな2点目は世界一の侍選手の育ち方で、ソフトバンクの近藤健介選手の父親が書いた本。近藤選手はソフトバンクの超一流選手であり、父親は中学校の数学の先生で、母親も小学校の先生をされてたということ。両親が教員の家庭から、一流のプロ野球選手を育てたことに非常に興味を持った。近藤選手は小さい頃はとても負けず嫌いで、習い事は剣道やテニス、スイミング等次々とはじめてすぐ辞める子であった。子供に任せていたが、ただ一つ与えなかったのはゲーム機だったとのこと。でもゲーム機を買い与えなかったので友達のうちでバンバンやってたというのも面白い。母親は講師だったので、健介の中学校時代の野球練習を毎日のように見に行った。そのため監督が怒る理由もよくわかったし、健介少年も不平不満を言うことは一切なかったとのこと。

あとはプロ入りしてからも挨拶ができない選手は使われない、礼儀は非常に大事だと言っている、非常に面白いなと感じた。

3 小学3年国語(物語文)「モチモチの木」(斎藤隆介)

(1) 提案授業「モチモチの木」(筑波大付属小 青山由紀)

(2) お気に入りの登場人物を「イチオシの登場人物フリップで紹介しよう」

大きな3点目が、小学3年の国語に出ている物語「モチモチの木」の紹介。去年の金ヶ瀬小学校の指導主事訪問で、このモチモチの木を渡辺先生が授業したもの。ちょうど同じようなところであった。

4 加固希志男教科調査官の論説

(1) 小学校算数「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

(2) 算数科における学習指導要領実施状況調査結果を踏まえた学習指導の改善・充実

4点目は加固教科調査官の論説で、(1)は小学校算数の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実について具体的にまとめたもので、やはりどちらも周りの友達にいつでも関わられるようにすること大事であり、孤独的な学び、一人学びではなく、皆と話し合いながらするのが両方とも正しいやり方だというもの。

(2)の資料は、初等教育資料にあった学力調査の問題で、どこが課題かということを確認に示されているもので、この辺りについて参考になるかなと思う。

5 【学びのたより】「探求的で深い学び」、その険しさを超えて（石井順治）

大きな5点目は石井順治先生の学びのたよりで、探求的で深い学びの実現は、主体性、卓越性、平等性の同時実現である。私達も今年度「ふるさと探究 おおがわら学」の作成に取り組み、その探究学習に対応していこうと考えている。文科省で進めている方向と同じになるのではないかと思う。

6 東京都の保護者対応ガイドラインの検討（小野田正利）

①理解と誤解の概念

②いじめ訴えには無力

③どの段階で判断するか

大きな6点目は、東京都の保護者対応ガイドラインの検討ということで、大河原町教育委員会において東京都のガイドラインを参考にして作成し、委員の皆様方にもご検討いただきまして、今保護者へ配布する文書を作成というか、検討しているもの。

小野田正利先生が東京都のガイドラインのチェックをされており、やはり保護者に配布するときは、言葉の文末に気をつけることや1回目の相談に30分とかでは無理で、何時間かかっても仕様がなないんだというようなことが書かれているもの。

7 全国学力・学習状況調査に向けて

8 教職員の事故防止と服務規律確保等

丹羽委員

カスハラ、パワハラについて。イエローカードやレッドカードはなかなか自分でわからない。自分で抑えられないのだと思う。

「おおきな木」について、根っこの部分は、相手の幸せということではないか。相手の幸せを願って、本当に純粋に、何でも持っていきなさい、私の体も全部あなたのためにあげますよという、だからこれが根っこのところにある、言葉も優しいし、誤解のない言葉で自分の全てを捧げるということなのだと思う。

話は変わるが、役場について、せめて窓口とかの課は、町民やお客さんが来たら、こんにちとはとか、おはようございますを言って欲しい。皆黙って下を向いてパソコンを見ている。あれは暗くなるし、普通の会社ならば絶対に挨拶をする。銀行などは気持ち良いくらい、いらっしやいませという挨拶をしてくれる。役場はほぼ全員パソコンばかり見ており、本人たちもつらいんじゃないかと思う。周りの方とコミュニケーションもできないし挨拶もできない。先程の教育長報告の中の本の紹介でも、挨拶はとても大事なのだとおっしゃったけれども、役場の職員の方々も誰かが来たらおはようございます、こんにちとはと挨拶をしてほしい。まずは教育総務課からそうしてほしい。

一益森委員

石井順治先生の学びのたよりを読ませていただいて、4月スタートにあたってとても良い石井先生のお考えの文章だと感じた。この石井先生の文章の中の一番最後のところでAIの話が出てきて、AIが人間の生き方を変えつつある現在、人間が人間らしさを発揮して生き続けるために必要なのは、というふうなくだりであるが、先日の角田市の研修会で、JAXAの職員の方がお話されたようなことを考えると、おそらく探究的な学びの究極はあそこなのではないのかと思った。突き詰めていくと宇宙ロケットの開発ということを実現するためには、シュミレーションをしなければならないし、宇宙空間で何をどういうふうに飛ばせばどれぐらいの重量でも大丈夫だよというふうなことは、実験などはできない。それをAIでやっていくからできることなのではないか。というふうなことを考えると、小さいうちから探究的な学習を行うべきである。ホテル白萩での研修会でも言っていたが、小学校では一生懸命やっており、高校はものすごく一生懸命にやっている。中学校はこれからかと思うが、そういうことをあわせて考えていくと、やはりAIも含めICTは、実は子供たちにとって切り離して考えることができないもので、探究的に突き詰めていく上で、必要で欠かすことができないツールとしておそらく、今もそうだし、これからはますますそういうものになっていくのだ、というのをきちんと押さえたほうが良いと思った。

最近検索するときに、AIで答えてくれるようになってきているが、おおきな木

について教えてほしいと質問してみた。2010年に訳本で出たときに、ブームがあり、無償の愛というか、それについていろいろ議論があった。無償の愛に対して、いやあれは偽善だというような人と無償の愛だという人が対立してというのがあった。私は当時買いはしなかったが読んでみて、そうだよ無償の愛だよ、とそれぐらいしか感じなかった。AIでやり取りしていくと最後にさらに問いかけてきて、あなたは無償で与え続ける木の行動についてどのように感じましたかと質問された。そして答えた。ただ、AIがまた聞いてきた。その次は、幸せの裏側にある痛みを読み取られた今、改めて振り返ってみると、あの切り株になってしまったラストシーンにあなたはどう思いますか。と言うのを聞いてきてそれも答えた。それで最後に何と聞いてきたかという、この物語に続きがあるとしたら、切り株に座った2人はその後どんな言葉を交わしたと思いますかと聞いてきた。それについてはまだ答えを言ってない。こういうやりとりもできる。石井先生の対話的な学びではないが、AIは絶対否定しない。肯定してくる。その上でさらに問いかけてくる。すると周りが進むというふうなことを今回感じさせていただいたということ。

あとはモチモチの木についても改めて見た。モチモチの木ぐらいの有名なお話だと読み聞かせの動画が出ている。教科書が出てきてそれで読んでいく。久しぶりに読み聞かせを聞いてみた。今考えてみると、あのお話で出てくるのは、豆太とじさまとお医者様の3人である。お父さんはクマの狩りに行って死んでしまったのか。お母さんがいないから、おじいちゃんといつも寝ているのか。これまで考えたこともなかったようなことまで考えてしまう。お母さんが亡くなるということをお小いうちに目の当たりにして、死への恐怖を感じているのか。だからじさまがあれだけ苦しんだときに、裸足であろうが何だろうが町のお医者さんと呼ばれに行かなきゃこれは大変だ、じいちゃんがいなくなっちゃったおれはどうなるのかと思ったかも知れない。ていうようなことを感じたとか。なんだろう、石井先生のおかげだと思うのだが、私自身こんなふうに関心するということはなかったなと改めて思った。

鈴木教育長

確かに今の一盃森委員のような解釈が出てくれば深くなる。子供たちの視野も広がってくると思う。これが学びだと思う。

一盃森委員

「ふるさと探求 おおがわら学」について、10時間の配当でどういうふうに取り組んでいくのかを参考にお聞きしたい。

また丹羽委員がおっしゃられたとおり、世の中のほとんどの人がスマホを使っている。SNSもその通りで、世の中は本当に変わっているのだということ、最近本屋大賞を受賞した本を読んでしみじみと実感したもの。

林 委員

大きな木に戻ってもよろしいですか。

この絵本は私も読んだときに、もう前ではあるが言葉にできない感情が湧いてきて、考えさせられて、そして時期を空けて読むと、また違うところの感情が湧くという、それでこの本はすごいなと思っていたところに、今回この宇垣アナウンサーが幼稚園のときの愛読書だというふうを書いてらっしゃったので驚いたもの。大人でもこれだけ揺り動かされているのに幼稚園のときの愛読書とはどういうことだろうというふうに進めたと、お父さんが日本語訳をしてくれていた。多分お父さんが子供のために訳してくれた言葉が娘さんとしてすごく心にほっこりきて、愛読書になったのだなと思ったときに、やはり親の愛が娘に移っているなというふうなことをまず考えた。このお話は大人でも難しいと私もずっと考えていた。何十回も読み直すが、そのたびに違う感情に自分はなる。そして、ご存知かもしれないが、2人の訳者がいる。日本語訳が2人によって少しがニュアンスが違っており。本田氏の方がちょっとほっこりするようなどころもあったりして、それこそ平行読書ではないが、読み比べをしたときもやはり大人の本、大人が読んでも、深く考えさせられる本だなというふうにする。本当に良書、秀逸な本であると思う。小学生に与えたらどうなのかなと思ったりしたが、現役教師のときは結局難し過ぎると思え与えられなかった。ただ今回宇垣アナウンサーの例を読んだときに、もしかしたら子供たちのほうがもっと想像豊かに感じるのかなと思った。

また、先程一盃森委員が AI に聞いたという話があったが、AI も本当に人の感情を読むようにどんどんなっていく。これから先も日に日に学習力が増してくると思う。でも今はまだその感情の揺らぎに対応するときは、ちょっと AI も戸惑って、一盃森委員に問い返しており、そして問い返すことで、AI が学習するというふうなことで進化しているのではないか。数年先には、自分の感情をもう全て読まれるような AI が出てくるのではないのかとすごく怖いなと思っている。そのため、そこにやはり対応できるというか、そこに負けない自分の感情がわかる人に育てなければいけない。学校教育とは、そこがすごく難しいなということを感じた。

片 倉 委員

石井順治先生の学びの素顔のなかの「けんたと元気もりもり先生」のお話がすごく良かったなと思って読んでいた。他にモチモチの木とかおおきな木とか懐かしいなというお話もあったが、このけんたと元気もりもり先生のお話がすごくよかった。男の子同士の元気な 10 歳前後のお友達で、言いたいことがなかなか伝わらないという感じがわかるな、もどかしい感じというか。先生が子供たちの関わりの中で奮闘していく姿とか、この詩のそれぞれの解釈がクラスメイトの中でいろいろ出てくる中で、先生の読みが変わっていつ

て子供たちの読みも変わって先生がクラスメイトとの距離がどんどん近くなっていくけたの姿だったり、授業を終えて喜んで嬉しくなって込み上げてしまう先生に、こんなふうに授業が進んでいくと、先生と子供たちの信頼関係が築けて素敵だなというふうに思った。こういう授業がいろいろな学校であると良いと思ったもの。

あと保険について、いじめの保険というのは私も知ってたが、もう今、不登校保険というのが出るようになったんだなというのに驚いた。学校との話し合いがうまくいかなくなってくると、こういった保険を活用することを視野に入れる保護者が増えていくのか、こういう時代なのかなと思った。

今はスマホで何でも検索できるので、こういったものを見つけてしまうと、もうやはり保険があることが盾ではないが、これをもとに学校との話し合いとかも変わってくるのかなというふうに感じたもの。

(2) 各課長報告

教育総務課長、生涯学習課長

令和8年度教育委員会人事異動について説明。

令和8年度行事予定について説明。

10 次回教育委員会の開催日程について

鈴木教育長 | 次回の定例教育委員会は令和8年5月15日(金)午後2時から開催する。

11 閉会宣言 午後4時00分

令和8年5月15日

署名委員

署名委員